

石川県立美術館だより

平成15年1月1日発行 第231号

鳥と語る

詩魂の画家 **脇田和展**

1月4日(土)~2月2日(日) 会期中無休



暖帯 昭和60(1985)年 脇田美術館蔵

目次

鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展.....2
茶道具と名物裂3
新春優品選 -茶道美術を中心に-3
明治の工芸、常設展示室 主な展示作品4
「ふるさと発見子どもツアー」を終えて5

美術館小史・余話(30)文化財現地見学報告...6
月例映画会 今月のイチ押し、各地の展覧会...7
次回の展覧会、一月の行事案内7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 ...8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

脇田和展

鳥と語る 詩魂の画家

1月4日(土)~2月2日(日)会期中無休

主催 / 石川県立美術館

協力 / 脇田美術館



あらし 昭和30(1955)年
新潟県立近代美術館蔵



雨 昭和40(1965)年
東京都現代美術館蔵



かたつむり 昭和53(1978)年
世田谷美術館蔵



かくれんぼ 昭和55(1980)年
東京国立近代美術館蔵



画家は毎日シャツを取り替える
昭和59(1983)年 脇田美術館蔵

現代日本洋画壇の第一人者 脇田和氏は、鳥と子供を題材に、詩情豊かな作品を描き続けて来ました。その至純といふべき世界は、深く温かい感動を観るものに与えます。

明治四十一年、金沢出身の実業家 脇田 勇の次男として、東京青山に生まれた脇田氏は、十五歳でドイツ・ベルリンに留学し、八年間絵画や各種の版画技法など美術全般にわたって研鑽を積みました。帰国後は戦前の洋画壇に頭角を現し、昭和十一年、猪熊弦一郎、小磯良平らと新制作派協会を創立して、以後、常に具象絵画の第一線にあつて画壇をリードして来ました。抒情であると同時に堅固な構成を持つ氏の作品は、情と智とが高いレベルで融合し、その融通無碍の世界は様々な世代から幅広い支持を得ています。

本展では脇田氏自身が軽井沢に築かれた脇田美術館の協力のもと、初期から近作までの油彩、水彩、素描、版画等の代表作百三十七点を一堂に集め、その七十年を越える芸術の軌跡をご覧いただけます。

なお、明治維新前、脇田家は加賀藩前田家藩士として金沢に居を構え、町奉行をつとめるなど日々活躍された家柄でした。その意味で、本展とのゆかりは深く、ここに故地金沢で初の展覧会を開催する運びとなりました。脇田芸術の叙情美あふれる優美・幽玄の世界を、存分にご堪能いただければ幸いです。

主な作品	
裸婦習作	昭和4
二人	昭和17
鳥に話す	昭和28
あらし	昭和30
午睡	昭和34
蚤の市のグリーダアップ	昭和36
窓	昭和40
黄色の鳥	昭和41
雷鳥	昭和48

雲岡石仏	昭和50
かたつむり	昭和53
かくれんぼ	昭和55
ボンコツ車を誘導する鳥	昭和56
画家は毎日シャツを取り替える	昭和58
S子のコレクション	昭和58
暖帯	昭和60
緑雨	昭和60
鳥の来る道	昭和61
二つの安居	昭和67
いつぞやの鳥	平成12

講演会 聴講無料

演題 鳥たちの訪れと庭園
— 脇田和の芸術世界 —

講師 木島俊介氏
(共立女子大学教授・美術評論家)

日時 一月十二日(日)午後一時三十分
会場 当館ホール

観覧料

観覧料	個人	団体(20名以上)
一般	800円	650円
大学生	600円	500円
高中小生	300円	200円

当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金でご覧になれます。

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

茶道具と名物裂

1月4日(土)~2月2日(日)

「茶を飲む」という喫茶の風習は中国(前漢)に始まり、平安時代初期には、既に日本へ伝来してしました。鎌倉時代、公家・武家・寺社の間で広く行なわれるようになり、室町時代の終わり頃になると、その風習は町衆にまで広がります。特に京都・奈良・堺において盛んとなったそれは、村田珠光に始まるわびを理念とした「茶の湯」であり、用いられる茶碗・茶入・茶釜などの茶道具、書画・花を含めた茶室の空間が、生活芸術として捉えられるようになりました。戦国時代になると時の権力者であった織田信長・豊臣秀吉が「茶の湯」に執心するようになり、名器とされた茶道具を収集し始めます。秀吉が黄金の茶室を設け、北野大茶湯を催したことからわかるように、大名の趣向は次第にわびから離れた贅沢で派手なものとなっていきます。江戸時代に入るとその主導が町衆から大名に移行したことにより、その傾向が更に顕著となります。

加賀藩の茶道は、藩祖利家の時代に始まり、以降、歴代藩主へその嗜好は受け継がれ、茶道具も多く揃えられました。本特集では、前田家の家紋である梅を配した「玳皮盞天目茶碗(梅花天目)」、孫六の銘を持つ「古瀬戸茶入」など茶道具二十点と名物裂十九点を紹介します。

名物裂とは、舶載された外来裂のうち、特に茶人や好事家選ばれ「名物」として珍重された裂をいいます。そのほとんどは中国の宋元明代のもので、書画の表装や茶道具の仕覆、能装束に用いられました。茶と能を好んだ前田家では、外来裂の収集に励む一方、その元には他の大名家からも珍しい裂が届けられました。

鳳凰の丸文を織り出した「双鳳丸文様金襴」は、この裂で作った能装束で足利義政が能曲「二人静」を舞ったとされることから、「二人静」の銘を持ちます。名物裂の中でも室町時代中頃までに伝来した「古渡り」です。前田家に伝存する名物裂は、質量ともに優れたコレクションとしてよく知られています。

新しい年が明けました。日本人にとって、元日には特別な意味がありました。それは、去年が今年になつたというだけでなく、すべてが新たに一から始まるという神聖な日であり、特別な日と考えられています。しかし現代人は高度情報化社会のなかで日々の時間に追われていて、新年を迎えるという「節目」の感覚が非常に希薄になってきています。それ故、この「節目」に先人が培った日本文化を再考する機縁とすべきではないでしょうか。

今回は、晩年の小堀遠州が迎春にあたって書かれた書状や、近衛龍山の「歳旦和歌」、本阿弥光悦の「和歌扇面画賛」、さらには「和漢朗詠集 山(嵯峨切)」、「古今和歌集卷第六断簡(白砂切)」などの作品から、自然観のなかに迎春の特別な想いや日本美を詠んだ作者の心に触れていただきたいと思います。

また初釜の季節ですが、当館の茶道美術は、山川コレクションがその核を成しています。このコレクションは、金沢の素封家山川家が三代にわたって収集伝世したものです。言うまでもなく野々村仁清の「国宝色絵雉香炉」は初代甚兵衛の収集ですが、このコレクションの特色は、香合の質の高さとその種類の豊富さにあります。「和蘭陀白雁香合」(景文)は、オランダのデルフト窯で作られ、江戸時代初頭にわが国に舶載しました。その優雅で愛らしい趣が好まれ、茶人が香合に見立てたもので、古来より名高い名品です。また、仁清の「色絵花笠香合」は、仁清の技の冴えを示す薄作りのシャープな器体に、青、赤、緑の彩色と金彩を駆使した艶美ともいえる華やかな作品です。そのほか「交趾鹿香合」、「交趾金花鳥香合」、「宋胡録柿香合」、「黄瀬戸根太香合」や、茶入、茶碗など約五十点を展示し、茶道という日本文化の精神性を示す美の一端に、新たな年の始まりを感じていただければ幸いです。

常設展示室 第2展示室)

特集

新春優品選

茶道美術を中心に

1月4日(土)~2月2日(日)



色絵花笠香合 野々村仁清 江戸十七世紀



伊羅保片身替茶碗 李朝十七世紀

常設展示室 第5展示室)
特集
 輸出の華
明治の工芸
 1月4日(土)~2月2日(日)



蒔絵落雁図丸額 松岡吉平



色絵龍燈鬼置物 初代諏訪蘇山

当館では、工芸部門についても江戸時代から現代にかけて、陶芸をはじめ各分野での作品を多数所蔵しています。これはとりもなおさず、前田家歴代藩主によって、早くから奨励策が積極的にとられていたことを受けて、藩政時代から優れた工芸作家を輩出し、また藩侯以下、今日でいう優れた審美眼を持った蒐集家が多かったという土地柄の表れとも言えます。

その中で、明治時代から昭和前期にかけては、これまでは輸出仕様の装飾過剰とでも言うべきものが主流となった、あまり評価の高い作品に恵まれてはいない時代であるとの認識が一般的でした。しかしながら、その技術は、明治維新の政治的、社会的、経済的な激変を乗り越えながら、いつその発展を遂げたものと言って良く、新しい時代の求めに応じるための惜しまない努力の結実とも言えます。

また、明治時代において、内外の博覧会などで活躍する作家が多かっただけでなく、明治二十年に現在の石川県立工業高校の前身にあたる金沢工業学校を、全国初の美術中等教育機関として発足させるなど、教育機関の充実にも石川県は努力しています。

当館では、毎年館蔵品を主体にこの展示を行うことで、江戸時代から今日まで受け継がれる工芸技術において、明治という一時代の最良の部分を提示することを試んでいます。そのために、展示作品の中には幕末や大正以後のものも、意匠や技術の面で前後の流れを比較参考するものとして、少し加えてあります。

また、前回から明治の工芸作家とその作品のみならず、時代状況をも含めて、よりいっそうその魅力を楽しんでいただくことを願い、陶磁・漆工・金工の分野に加えて、当時の図案類も展示いたします。そして、今回は晩年帝室技芸員となった初代諏訪蘇山の彫塑的作品二点を久方ぶりに並べて展示しますので、あわせてご覧いただければ幸いです。

前田育徳会展示室

● 特集 茶道具と名物裂
 玳瑁蓋天目茶碗(梅花天目)
 古瀬戸茶入
 双鳳丸文様金襴

第1展示室

● 色絵雄香炉
 色絵雌雄香炉

野々村仁清
 野々村仁清

第2展示室

● 古九谷
 色絵鳳凰図平鉢
 青手老松図平鉢

狩野尚信
 千利休

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

● 女神
 ETUDE(A)
 馬に凭る(B)
 彫塑・造形

上條陽子
 鴨居玲
 高光一也

● 焦土を行く
 白銅浮彫「豊穰なるライン」

石田康夫
 坂坦道
 蓮田修吾郎

第5展示室(工芸)

● 染色
 友禅赤茶地鶏落葉文訪問着「暁声」
 友禅婦人室用衝立
 特集 輸出の華―明治の工芸
 上の記事をご覧ください。

上野為二
 中山修三

第6展示室(日本画)

● 残照
 虞美人草
 長江の朝
 観覧料

西山英雄
 野田九浦
 横山大観

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	
一般 280円	一般 280円		
大学生 220円	大学生 220円		



残照 西山英雄



焦土を行く 坂坦道



和蘭陀白雁香台 デルフト寮
 オランダ十七世紀

常設展示室
主な展示作品
 1月4日(土)~2月2日(日)

● = 国宝 = 重要文化財
 = 石川県指定文化財

学校週五日制に対応

ふるさと教育推進事業

いしかわをもっと学びたい2002

ふらわんこ鑑賞ワークショップ

四月より学校週五日制が始まり、土曜の一日自分の時間が増えた子ども達に、この機会を利用し、ふるさと教育推進事業の一つとして、教育委員会の生涯学習課から小学校四～六年生を対象に、夏休みを是らんで毎週土曜日、県内いくつかの施設を見学にまわる企画を立てたので、県立美術館では夏休み前の毎週土曜日に一時間程度の鑑賞をお願いしたいという依頼がありました。

今年度は学校との連携、児童生徒対象の行事に力を入れた年でしたので、喜んでお引き受けしたものの、1時間という枠の中、いくら子ども達が自分で申し込んで参加するとしても、ほかの施設を午前中にまわってきて午後の一番組に、集中して作品鑑賞できるのかな、どれくらい反応があるのかな、子供向けに特別の作品展示を組んであるわけではないぞ、など、どうだろう、こうだろうとずいぶん考えていたのが事実です。結論として迎える方としては、せっかくなかたきさんの子ども達が美術館に来てくれるのだから、実際にこちらの方に足を運ばなければ味わうことのない、生の作品の迫力にしっかりとふれてもらえるように案内をセット、そのうえで、作品を鑑賞して感じた生の声を聞きたく、またその声を形にして残したく、分野に応じて何種類かのワークシートを用意し、来館に備えました。

さあ、子ども達がやってきました。作



第1 展示室

品鑑賞の前に美術館についてお話をし、常設展示の作品と一緒に見てまわり、その後、各自の時間を設けるという設定です。鑑賞が終わった後に自由にワークシートを記入してくれるようにお願いしてから展示室をまわったのですが、美術館についてお話ししていたときは午前中からの疲れから集中できない子も見受けられたのですが、展示室に移動し、作品の説明を始めると、話を一生懸命聞き、こちらの問い掛けに反応し、疑問があれば即質問を投げかけてきました。自分で自由に鑑賞した後、ワークシートを記入する時間に至っては、第一印象で決めていたお目当ての作品まで突進して行く子や、何かを感じた作品の前でじっくり鑑賞した後、作品の声なき声を汲んでワークシートに記入する子、顔をほころばせたり、難しい顔になったり、百面相をしながら感じたことを素直に記入する子、それぞれに子ども達の素直な感想をたくさんいただくことができました。また、生涯学習課の方からも、行きのバスの中では「美術館に行くのを楽しみにしている」という声、終わりのアンケートでは「時間が足りなかった、もっと鑑賞したかった」やタイトルに合わせる「いろんな発見が出来た」という声があったことをお知らせいただき嬉しかったです。こうした子ども達の姿や、声が大変嬉しく思います。

今回美術館を訪れた子ども達には、形として残るお土産は多く無いのですが、心の中にたくさんさんの感動を持って帰ることが出来たと思うのです。又、こちらの方も、大人が「この作品を鑑賞するのは小学生ではちょっと難しすぎるのではないのだろうか」などという心配は、作品の持つ力と、こちらからのほんの少しの作品解説で心配はいらぬ事を改めて実感させてもらえました。

こうして、私は気をよくして、秋の「利家とまつ」展での親子連れ・児童生徒向けの感想記入シートいりパンフレット作成へとつなげていくこととなったわけです。

現在、子ども達に記入してもらったワークシートは二階常設展示にあるロビーに、図録見本や「利家とまつ」展の感想と共に閲覧の棚に入っています。来館の折には是非ご覧ください。

ではその中から二点紹介いたしましょう。



ワークシート (鴨居玲)



ワークシート (青手桜花散文平鉢 古九谷)

様々な楽しい施設がたくさんある中、休日に自分から自発的に美術館へ行こうと子どもが足を運ぶのは容易なことではないと思われれます。ですが、美術館に足を運び、作品を目の当たりにすることによって、実物を鑑賞する時にしか味わうことの出来ない迫力、表現の良さや美しさに気づくことができます。感動が生まれます。また、このような少年期の感動が、生涯にわたって美術作品に親しもうとする心が育つことにつながっていくと思います。児童生徒のみならず、またその保護者のみなさん、土曜日に出来た時間でぜひ、実際の作品を見にこちらに足を運んで、感動を持ち帰ってください。

(西ゆづ子 学芸員)

美術館小史・余話 30

嶋崎 丞すまひ 当館館長

旧石川県美術館の別館が開館したのは、この連載の二十回目(第二十一号)で述べたように、昭和四十三年の九月二十一日であった。二階は本館から移した九谷焼の常設展示室となり、一階には茶室が設けられた。こうして、手狭で今ひとつという感じであった美術館も、施設内容ともに形を整えて、充実した活動が出来るようになったのである。

そうした時に皇太子殿下(現在の天皇陛下)が石川県に行啓されることになり、美術館へもお立寄りになられることが決定した。皇族の方々の中でも、皇太子殿下といふことになると、警備を含めて受け入れ態勢を整えることは大変なことである。またその頃の皇太子殿下ご夫妻は、どちらかといえば美智子妃殿下に対する国民的関心が高く、お二人の行啓されるころはいわゆる「ミッチーブーム」の余波がまだ残っており、どこでも大変な混雑であった。従ってお二人がお立寄りになるということであれば、そうした混雑にもどう対応するかが悩みの種となった。ましてや美術館としては初めての経験であり、一体全体どうなることやらと、毎日毎日その準備に追われていた最中、こんなニュースが舞い込んできた。確かご懐妊の様子とかで、妃殿下の行啓は突如中止となり、皇太子殿下お一人のみの行啓になるというのである。まさにほっとするやら、がっかりするやら、何ともいえない気持ちで一杯になってしまった。

殿下にお立寄りいただいた日は十月八日であり、別館が開館してからわずか十七日目であった。殿下には、本館特別展示室の国宝雉香炉と、別館に移った古九谷の数々の名品をご鑑賞いただいたが、古九谷に特に深い関心を示され、ご案内役の当時の高橋(介州)館長に、いろいろとご質問されていた。

皇太子殿下のご来館



古九谷をご覧になる皇太子殿下(今上陛下・右端)
(左から2人目は故中西前知事、3人目高橋元館長)

第32回文化財現地見学は「阪神の美術館散策」と題して、去る十一月十六日(土)、十七日(日)の二日間、渡って実施されました。参加人数は四十五名。同地方へは昭和六十三年以来十四年ぶり二回目の旅になります。この間には、阪神・淡路大震災があり、貴重な文化財の数々も大きな被害を受けておりますが、今ではこの惨状をほとんど目にする事もなく、見事に復興を遂げております。

十六日(土)早朝、美術館前を出発。最初の訪問先は逸翁美術館(池田市)。館の入り口で、岡田館長・事務局の方より、挨拶、館の概要説明をいただきました。折しも「開館45周年記念名品展」を開催中。たくさんのお茶道具をはじめとする名品やお庭、茶室など、興味深く鑑賞させていただきました。

川西市の飛び地にある満願寺。ご住職からお寺の由来をお伺いした後、秘仏である千手観音様を拝観させていただきました。とても美しく、一同とても心穏やかになる感がありました。また、紅葉の名所としても知られているお寺で、その美しさをもあわせて堪能させていただきました。

次に伊丹の方へと向かい、みやのまえ文化郷内の柿衛文庫・伊丹市立美術館。柿衛文庫では、学芸員の方より同じ敷地内にある酒蔵跡と講義室で、丁寧に説明をいただき、また、展示室内でも、参加者の様々な質問に答えてくださいました。「大きな展示会が済んだ後の小企画展なのですが」といわれていましたが、芭蕉、蕪村のものがふんだんに展示されており、さすが日本三大俳諧コレクションの一つ。伊丹市美術館の方ではビゴアの企画展を開催中で、こちらの方も、当時の風刺の目を興味深く鑑賞させていただきました。一日目はここで終了。二日目は神戸市中心の見学となるため、神戸に移動。

翌朝、秋晴れの相楽園(神戸市)からスタート。旧ハッサム邸の一般公開にあわせて菊花展が催され、花、色づいた紅葉と、庭園内に織りなされる彩りが何とも美しく、朝の散歩を大いに満喫しました。

文化財現地見学報告

次に六甲アイランドへ足を向け、神戸市立小磯記念美術館へ。学芸員の方から館についての概要説明を受け、はやる心を押さえ展示室へ。今回、開館10周年を記念し、「小磯良平回顧展」を開催中でしたが、氏の代表作に加え、通常は門外不出とされている、迎賓館蔵の壁画「音楽」「絵画」の2点が、この日まで公開中。大作を前に大感激、なかなか巡り会うことのない名画に大変満足。小磯芸術の魅力をふんだんに味わうことが出来ました。



芦屋市谷崎潤一郎記念館

室につくやいなや、学芸員の方から展示室で館の概要・展示品について説明していただきました。今回は「茶会の懐石・炭道具 志野・織部・仁清・乾山など」と題し、お茶会に用いられている懐石道具と炭道具一式を展示中。美しいお道具の数々に興味深く鑑賞させていただきました。

最後は芦屋市谷崎潤一郎記念館へ。「棟方志功と谷崎潤一郎」と題し、企画展示中。学芸員の方から展示室内で説明を受け、北陸ではなじみの深い棟方志功と谷崎潤一郎との取り合わせに、本の装幀・挿し絵など親しみ深く鑑賞できたと思います。

西日とも天候に恵まれ、行く先々での名品との出会いはもちろん、景色の美しさも満喫することができ何よりだったと言う声をたくさんいただきました。ありがとうございました。皆様のご協力のおかげで無事全行程を終えることが出来ました。ここに、ご参加の皆様と各見学地で、大変お世話くださいました関係各位に深く感謝を申し上げます。また皆様には次回参加をお待ちしております。

(西ゆづ子 学芸員)

月例映画会 今月のイチ押し

一月の月例映画会は、次の二本を上映いたします。

- 一月十九日(日)
「利休の茶」(45分)
- 一月二十六日(日)
「壁画よみがえる
法隆寺金堂壁画再現の記録」
(44分)

「利休の茶」は、茶の湯の大成者として知られる千利休の侘び茶の世界を、具体的な資料に基づいて浮き彫りにしようとするものです。映画では、現在残されている利休ゆかりの茶室や茶碗、茶入、水指、茶釜、花入などの茶道具、さらに絵画や墨跡、建築、文献史料など、国宝十点、重要文化財十七点を含む貴重な品々を紹介し、それらを通して利休の美意識に触れることができることと思われます。茶の湯に関心のある人は、一度は見ておきたい映画といえましょう。

二回目の上映日にあたる一月二十六日は、「文化財防火デー」ということをご存じでしょうか。これは、今から半世紀ほどさかのぼる昭和二十四年一月二十六日、法隆寺金堂が炎上し、その内部にあった壁画が焼損するという衝撃的な出来事がきっかけとなって定められました。文化財を災害から守るため、この日に全国的に文化財防火運動を展開し、文化財愛護の意識を高めていこうとするものです。

「壁画よみがえる」は、火災にあつた法隆寺金堂の壁画再現の記録映画です。世界最古の木造建築として知られる法隆寺の金堂壁画は、かねてより保存状態がかなり悪く、そのすぐれた美を後世に伝えようと、昭和十五年より第一期の模写事業が開始されました。それには、当時の日本画壇を代表する荒井寛方・中村岳陵・入江波光・橋本明治らが参加し、戦争をはさんで作業が続

けられたのですが、二十四年、模写作業中の金堂が炎上、壁画は無惨な姿となってしまいます。焼け出された壁画は、取り外して別に保管されましたが、二十九年に再建された金堂は白壁のままで、壁画の再現を望む声が強くなっていました。そこで四十二年、金堂内の壁面にはめ込むため、再び壁画の模写が行われることになり、安田鞞彦・前田青邨の総監修のもと、橋本明治・吉岡堅二ら計十四人の名だたる日本画家が、戦前に写された原寸大の写真や残された模写を参考に、古来の岩絵具と越前和紙を使って作業したわけです。模写は、火災の前の状態に復元することを目指し、まず原寸大の写真をコロタイプ印刷によって和紙の上に焼きつけ、次に胡粉の下地塗りを行い、そのあと彩色していくという手順で行われました。壁画全十二面の模写が完成したのは、約一年を経た四十三年二月のことです。『壁が白いうちは自分の絵を描かない』とする画家たちの、真摯な作業を映し出した映像には、ぴんと張りつめた空気がたどよい、ときおり挿入される傷んだ壁画の尊像の姿を見ていると、悠々の時を隔てて、いにしへの空間にタイムスリップしていくような印象を与えます。

一月の行事案内 《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
1/5 (日)	CDコンサート	武満 徹(3) 「ウインター」「マジナリア」ほか(約50分) 指揮 岩城宏之 演奏 NHK交響楽団ほか	ホール
1/11 (土)	土曜講座	教科書美術館 中学校編 (西ゆづ子 学芸員)	講義室
1/12 (日)	講演会	鳥たちの訪れと庭園―脇田和の芸術世界― 講師 木島俊介氏(共立女子大学教授・美術評論家)	ホール
1/18 (土)	土曜講座	洋画家列伝 14 向井潤吉 (二木伸一郎 学芸員)	講義室
1/19 (日)	月例映画会	利休の茶(45分)	ホール
1/25 (土)	土曜講座	水彩画の美2 (西田孝司 学芸員)	講義室
1/26 (日)	月例映画会	壁画よみがえる 法隆寺金堂壁画再現の記録(44分)	ホール

今月の全館休館日は一月一日(水)・三日(金)です。新春は四日(土)から開館します。

各地の展覧会

一月

- 開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。
- 立教開宗750年記念 大日蓮展 1/15~2/23
 - 東京国立博物館(東京都台東区) 〇三三三八三三 一一二二
 - 開館十周年記念 中西夏之展 2/23まで
 - 愛知県美術館(名古屋市中区) 〇五二一九七一 五五二二
 - 古筆と手鑑 1/7~2/2
 - 京都国立博物館(京都市東山区) 〇七五 五四一 一一五二
 - クールベ展 1/10~2/16
 - 大阪市立美術館(大阪市天王寺区) 〇六 六七七一 四八七四

次回の展覧会

- 能面と能装束 (前田育徳会展示室)
 - 江戸時代の絵画 (第2展示室)
 - 宮本三郎従軍素描 (第3展示室)
 - ―輸出の華― 明治の工芸 (第5展示室)
- 一月五日(水)・三月二日(日)



和歌扇面画賛

本阿弥光悦

永禄元年(1558)~寛永14年(1637)

桃山~江戸時代 16~17世紀

縦36.2 横57.9 (cm)

本阿弥光悦は、家業の刀剣の鑑定や手入れ以上に、まず能書家として広く知られています。そして年紀のある作品を手がかりに、書風の展開を跡づけることができます。今日では、書家としての光悦の活動は、十六世紀末の慶長年間本格化すると考えられています。その際に注目したいのが、依屋宗達との共同作業です。宗達が光悦の書の料紙装飾を担当し、この両者が芸術的に良好な影響を及ぼし合って卷子や色紙、そしてここに紹介する扇面などに数多くの名品を遺しました。

この作品は扇の全面に銀泥を引き、墨で梅の枝を描き、胡粉と緑青によって花をあしらった上に、「思いいでよ たがかねこの末ならん 昨日の雲のあとの山風」という新古今和歌集第十四巻、恋歌四に収められている藤原家隆の歌が書かれています。この歌を直訳すれば、思い出してくれ、誰の約束の名残なのだろう、昨日の雲を吹き払った山風は、となり、ここにはあなたの約束は、吹き飛ばされた雲のようにはかないものだったとの思いが込められています。光悦はこの歌を書くにあたって、山や雲など歌の内容を直接示すのではなく、梅を下絵に求めたことにより、名残の歌意が強調されていることにも注目したいと思います。こうしたやさやかな趣向にも、王朝文化を復興しようという光悦や宗達の気概をつかがうことができます。

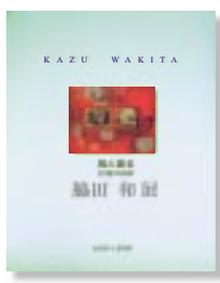
ミュージアムショップ通信

新しい年の初めの初春の
今日降る雪のいや重け吉事(大伴家持)

明けましておめでとございます。『万葉集』の一番最後を飾る、新年を祝ったおめでたい歌です。「降り積もる雪のように、いつそ重なれ、よき事よ」ってことですが、今年こそは慶事多きを祈ります、はい。

新春は「脇田和展」で幕開けです。脇田和さん、御年九十四歳。日本を代表する洋画家です。古い絵本に『おだんごぼん』というのがありますが、ご存じですか？。今でも書店で見かける四十年近くのロングセラーですが、これって脇田さんの絵なんですねえ、つい最近まで気が付きませんでした。彼のやさしく詩情豊かな世界は、子どもたちの心をもとらえていたのです。

絵本は今回の展覧会とは無関係ですが、そんな親しみもあってか、脇田さんの絵と出会うのが何だかワクワクします。さてさて最新刊の展覧会図録の方は、約百四十枚ものカラー作品図版を収録。論考や写真入りの詳しい年譜もついていて、これは楽しみです。さあ、皆さんも一緒に脇田芸術の世界へ…。



『鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展』
(税込定価2300円)

休館日

一月一日(水)~三日(金)

石川県立美術館だより

第一二二二号 平成十五年一月一日発行

〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(三三)七五八〇
FAX 〇七六(二二)四九五五〇